

第24期・第2回 臨床医学委員会 放射線・臨床検査分科会 議事要旨

日 時：平成30年10月22日（月）14:00～16:00

場 所：日本学術会議6階 6-C会議室（1）

出 席（13名）：神谷研二、青木茂樹、井上優介、多湖正夫、橋本優子、増田しのぶ、真鍋俊明、
三上芳喜、安井 弥、山田章吾、山田俊幸（名簿順）
菱沼 昭（参考人）
岩村 大（事務局）

欠 席（6名）：遠藤啓吾、定藤規弘、玉木長良、富樫かおり、山下俊一、米倉義晴（名簿順）

議 題

(1) 前回分科会議事要旨の確認について

井上委員長より前回議事要旨案（資料1）の確認があり、承認された。

(2) 議事要旨の公開について

井上委員長から、承認後の議事要旨が日本学術会議のウェブサイト上に公開されることになったことが資料5に基づいて説明された。本分科会では、次の分科会で承認を得た上で議事要旨を確定することになった。

(3) 「医療放射線の適正管理に関する検討会」について

青木幹事より、本分科会が前期に表出した「CT検査による医療被ばくの低減に関する提言」の具現化について紹介された。今年度の診療報酬改定で放射線被ばく管理が画像診断管理加算3及び頭部MRI加算の施設要件として取り入れられたのに加え、厚生労働省の「医療放射線の適正管理に関する検討会」における議論で医療安全管理体制の一貫として放射線安全管理が位置付けられる見込みであり、この審議内容が厚生労働省のホームページでも公開されていることが報告された。今期の活動でも、具現化につながることを意識して審議を行うことになった。

(4) 甲状腺機能検査TSH検査値の国際標準化について

菱沼 昭参考人（獨協医科大学感染制御・臨床検査医学講座）から甲状腺検査TSHの国際標準化について紹介された。多数の試薬メーカーから試薬が提供されているが、同じ検体を測定しても試薬によって測定結果が異なっている。この問題を克服するために国際的な取り組みが進んでおり、我が国でも関連学会、厚生労働省、企業で協議中である。試薬メーカーの協力が課題であること、行政には標準化された試薬の早急な認可を期待すること、患者や医療従事者は標準化された方法で測定されているかの確認が望まれることが説明された。山田俊幸委員から、一般的血液生化学検査では標準化が達成されて共用基準範囲が発表されているものの未だ共用基準範囲を導入していない施設があること、腫瘍マーカー、ホルモン、凝固線溶マーカーなどでは標準化が確立されていないものが多いことが紹介された（資料3）。

引き続き協議が行われ、診療報酬を利用した国際標準化の推進が提案された。ISOによる標準化もあるがこれは検査室の管理に関わる標準化であって検査値の標準化とは異なり、標準物質の測定結果に基づく検査結果の評価が課題であることが議論された。様々な臨床検査について標準化に関連した課題があり、TSHに限らず広く検討することが合意された。山田俊幸委員が提言内容を含めた案を検討し、次回分科会でさらに審議することになった。

(5) 今後の活動方針について

今期の活動方針について協議が行われた。

山田俊幸委員から、メディカルスタッフの専門性の関係で、臨床検査技師の認定制度の現状について紹介された（資料3）。

青木幹事から、画像診断報告書問題について紹介された（資料4-1, 4-2, 4-3）。報告書に癌疑いの記載があるにも関わらず情報が共有されず適切な診療が行われなかった事例が報道されているが、その背景と考えられる対策が説明され、根本的な問題としてCTやMRIの台数及び検査件数に対する放射線診断専門医の不足が指摘された。病理診断とも共通する問題があることが協議された。青木幹事、増田副委員長を中心に、学会等と協力しながら現状の整理と改善につながる提言について検討することになった。

増田副委員長から、AI時代の診断医に関する問題提起があり、本分科会でのAIへの取り組みについて協議が行われた。AI時代の診断医のあり方についてのシンポジウムを、日本医学放射線学会や日本病理学会との共催で日本学術会議講堂において開催する方針が合意され、井上委員長が企画書原案を作成し、増田副委員長から病理学会に、青木幹事から放射線学会に提案することになった。

(6) 次回の分科会の日程・予定について

次回（第24期・第3回）の日程について、平成31年1月下旬から2月上旬に開催することとし、電子メールで日程調整を行うことになった。